昭和25年3月14日　第三種郵便物承認　令和2年9月1日発行（毎月1回1日発行）通巻853号

禪の友

Zen no Tomo

9

September 2020

特集　両祖忌

ご本山だより
大本山永平寺【御征忌】

入道雲から鰯雲へと空の主役が変わり、朝夕の涼しさが気持ちをあらたにしてくれます。

さて、九月二十九日は大本山永平寺をお開きになりました高祖承陽大師道元禅師さまのご命日です。毎年、この時期を「御征忌」と呼び、全山総出でおつとめいたします。本年は新型コロナウイルス感染症の影響により例年どおりとはまいりませんが、禅師さまのご威徳を偲ぶ気持ちに変わりはございません。

九日間続く法要の最初に道元禅師さまを日頃お祀りしてある承陽殿から法堂へとお迎えいたします。永平寺の七堂伽藍の中でも最も高いところに位置している法堂は普段から朝のおつとめなど各種法要が行われています。この法堂にお座りいただき、私たちの今を身近に見ていただくのです。独特な緊張感の中、修行僧は袈裟をつけ、足には襪子という足袋に似た白い履物をつねにはいた最も敬意を表した僧形で山内を走り回ります。

道元禅師さまのお膝元で修行できる喜びに、自然と背筋が伸びます。常に作法を重んじ、動き続ける身体は自我を離れ、目まぐるしく変わる状況の中で「丁寧に、丁寧に」と自分を修めます。身も心も費やし時間を忘れてしまったような感覚、気が付けば最終日。

道元禅師さまに再び承陽殿にお戻りいただくとき、さわやかな空気が染み込んでくるのを感じるのです。

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより

大本山總持寺【中秋の月】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一

右から峨山禅師・瑩山禅師・明峰禅師

九月といえば中秋の月（十五夜）が思い浮かびます。また暑さも凌ぎやすくなってきて、何となく心が落ち着いてまいります。

中秋の月とは旧暦八月十五日の夜に見る月を指します。中秋の月を愛でる習慣は平安時代に中国から伝わり、新暦に改めると今年は十月一日（木）となります。

ところで、瑩山禅師さまは總持寺の住職を峨山禅師さまに譲られて永光寺へ帰られ、明峰禅師さまに後事を託された後、正中二（一三二五）年旧暦八月十五日、中秋の月が冴えわたる夜半にご入滅されました。

このことを孫弟子の大智禅師さまは「年々此の夜、中秋の月。特地一場、人を愁殺す」と偲ばれました。

私たちも十五夜は瑩山禅師さまを偲びつつ、月を愛でたいものです。

九月十二日（土）から十五日（火）まで、能登の祖院で御征忌会法要が江川禅師さまご親修にて奉修されます。鶴見の總持寺では御征忌会が十月に奉修されますが、本年はコロナウイルスの影響で両寺とも期間を一日短縮いたします。

十九日（土）から二十五日（金）は秋のお彼岸会です。暑さ寒さも彼岸までと申しますが、この異常気象下では言葉どおりに受け取れませんね。

お彼岸会法要は、今回もお檀家さまの参拝をご遠慮いただき、山内僧侶のみで執り行います。

コロナ禍によって新しい生活形態が生まれつつありますが、互いに気持ちを引き締め、一日一日をしっかりと歩んでまいりましょう。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

廃校に友を訪ぬる若葉風

福島県　鈴木 嘉志雄

評　ご自身の卒業した学校だろう。小学校のような気がする。その校舎はまだ在るのだが、そこにもう生徒たちの影はない。訪れると嘗ての友だちの面影が、そして自分の姿も見えてくるような気がした。叙情の深い句だ。

葬送の一部始終を蟇（ひきがえる）

鳥取県　眞山 博充

評　おそらくはこの葬儀は田園風景の片隅であると思う。蟇の声は延々とその葬儀の最中に響き渡る。蟇たちも死者の弔いをしているのだ。その生命力と死者への弔いとの組み合わせがなんとも余韻のあるものとなった。

◆捨つる風呑む風ありて鯉のぼり　大阪府　相原 才子

◆老鶯の二声のみで止めにけり　宮城県　髙橋 靜子

◆釣具屋の幟はためき青葉潮　青森県　中田 瑞穂

◆愉しくて鳴かねばをれず葭雀　北海道　大野 節子

◆一回り大きな月や灌仏会　奈良県　竹村 和成

◆びしょ濡れは子らの特権夏が来る　秋田県　田村 惠美子

◆風止みて天を仰げり鯉幟　滋賀県　五十嵐 勉

◆色白の雛の顔や和三盆　静岡県　東学 克江

◆子らの来て村の膨れる海開き　秋田県　小田嶌 恭葉

◆のどけしやまったり笑う布袋尊　愛媛県　井上 征郎

選者吟

十字架の薄暑の胸となりしかな

俊樹

作句小見　敬虔なるクリスチャンというより、若き女性のお洒落としての十字架のネックレスのことである。少し汗ばむような季節になると、その女性の若々しい生命力というものがそのネックレスから伝わってくる。

曹洞宗 歌壇

選・長澤 ちづ

帰ろうと言はずにゐのかと言ふ母の紀州訛りに終へし麦踏み

三重県　西村 廣親

評　麦踏みはまだ寒いころの農作業だが紀州訛りの柔らかな語感が一首に温かで長閑かな気を醸し出す。家族で力を合わせて働いた良き時代の空気を伝える追憶の一首か。

洗濯機けさの水音水鳥の水掻くやうな柔らかき音

岐阜県　後藤 進

評　三回使われる「水」の語が漸層的に結句へとつなげる。強めるのではなく高めてゆくところが巧みである。洗濯機の作動する無機質の音を、水鳥という命あるものに託した作者のその朝の心情の豊かさを思う。

◆葬列に泥手を合わせ田草取り下校の子らもお辞儀しており　秋田県　小田嶌 恭葉

◆安らぎのひとつ容(ふたち)か種子こぼし終えたる草は草に打ち伏す　兵庫県　前田 あつ子

◆沖の船数ふる他に思考なくまた視野に入る船影を追ふ　静岡県　杉原 民子

◆観客の居ない雨中の桜花賞に人馬は走るひたすら走る　静岡県　髙尾 善五

◆コロナ禍にいつもの路も人通る気配もなきに足早に過ぐ　宮城県　須藤 智恵子

◆さわやかに富士の峰霧うすらいて夏本番の山開き近し　静岡県　土屋 きみ江

◆春雨やひざに黒猫抱きかかえ一人語りをたっぷり聞かす　鳥取県　白岩 恒子

◆雨後の畑に残照浴びてなすきゅうり家族賄う苗数植えつ　岩手県　宍戸 さとる

◆忘れゐしサボテンの鉢に梅雨の朝ミルク色せし小さき花咲く　広島県　徳永 進一郎

◆コロナ禍に草むしりの日々これほどに庭整ひし年のなかりき　茨城県　田口 昭子

選者詠

窓に薔薇這わせるのみで湧きあがる旋律ありて傍ら過ぎぬ　ちづ

作歌小見　取り止めのない時の流れを印象的な船影として表現した杉原さん、猫への一人語りとした白岩さん、格別なことがなくとも味わい深い一首が出来ることを証明しています。外出自粛生活を前向きに捉えて田口さんの一首も力強いです。

【作品お待ちしています】ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々にP23　掲載の送付先までお送りください。